The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	技術と媒介の社会学
Author(s)	門部, 昌志
Citation	年報人間科学. 1999, 20-2, p. 391-410
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

技術と媒介の社会学

門部　昌志

〈要旨〉
本稿は、中井正一の著作を手がかりとして、メディアと思惟の関連性、及び媒介としての技術について議論するものである。「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」などの術語に見られるように、中井正一は、社会制度を考慮しながら、各文化段階におけるメディアと思惟形態の関連性を定式化した。本稿では、中井によるこのメディア史的展望とその理論的背景について述べる。私見では、この視点は、知識の社会的拘束性に着目するものであり、とりわけ、知識に内在すると同時に外在するメディアと思惟形態の関連を指摘する点で興味深いものである。一九三〇年代の日本で形成された、中井の視点の理論的背景として、本稿では、ベラ・バラージュの映画理論や実体概念から機能概念への移行に注目する。そして、身体の拡大としての機械という視点に加えて、機能概念の発展として位置づけられた技術の問題を考察する。中井における媒介としての技術とは、自然系列／人間的系列を関連づけ、現実と非現実を相互に転換するものである。本稿では、中井におけるメディア、およびその背景である、機能概念や技術論、媒介について考察する。

キーワード
中井正一
機能
技術
媒介
メディア

一・はじめに

美学者として出発し、「委員会の論理」で知られる中井正一は、一九五〇年代後半に鶴見俊輔が発表した諸論考を契機として「マルクス主義のコミュニケーション論」の文脈から論じられてきた〔鶴見　一九五七　一九五九　一九六二、山田　一九七二、針生　一九七三、竹内　一九八〇〕。ところが近年では、彼の著作はメディア論的関心から読み直される傾向にある〔上野　一九九五、桂　一九九六〕。一見したところ、中井正一に関する研究には(1)、コミュニケーション論からメディア論への移行が見いだせるかのようである。しかし、コミュニケーション論とメディア論の二分法を前提とした価値転倒が重要であるわけではない。というのは、マルクス主義のコミュニケーション論によってなされた中井研究の中に、メディア論的視点が既に含まれているからである(2)。中井自身の著作にもまた、メディア論的視点とコミュニケーション論的視点の両者を潜在的に見出しうる。したがって、メディア論とコミュニケーション論の二者択一は無意味である。中井正一のメディア論的側面を浮き彫りにする際に留意すべき点は、メディア論なき中井研究、およびコミュニケーション論なき中井研究の両者から距離をとることである。

ここで、コミュニケーション論の対象は、主体と主体の間における伝達と受容であるとし、メディア論の対象を主体と客体の間における認識の規定性であると定義する。だとすれば、メディア論とコミュニケーション論の対象は対立としてではなく、絡み合いの関係において把握されるべきである。なぜなら、諸主体間のコミュニケーションは何らかのメディアによって媒介されるからであり、また、客体としてのメディアによる主体の認識の規定は何らかのコミュニケーションにおいて生起するからである。したがって、課題となるのは、メディアとコミュニケーションの相互的前提を考慮しながら、中井研究におけるメディア社会学的視点を評価することである。

ここで私がメディア社会学と呼ぶ視点は、メディアを社会的コンテクストから切り離し、技術としてのメディアによる認識の規定性を過度に強調する技術決定論とは異なる。さらに、知識の社会的拘束性という問題において、メディア社会学の視点は社会的要因のみを重視するものではなく、メディアと認識との関連性もふまえたものである。メディア社会学の視点は、技術決定論と社会決定論の両者を回避する。それは、メディアと社会を二元的対立においてではなく、相互的な規定性において把握する。中井正一の著作を再考する本稿の試みは、技術決定論、および経済決定論とは異なり、メディアと社会の相互的な条件づけという視点を考慮しながら行うことになる。ただし、全てのメディア論が技術決定論であるわけではないという意味において、メディア社会学とメディア論は重複しうる。以下、本稿で「メディア論」と述べる際には、先に述べた「メディア社会学」としての意味を込めて用いることにしたい。

以下では、メディア／コミュニケーション、及び社会に関して、中井正一の著作に潜在する視点を再構成する。まず注目されるのは、

メディア史的視点と思惟形態の関連性という問題系である。知られるように、中井正一は、「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」、そして「電送せる言葉」や「見る言葉」などの術語を用いており、各メディアに対応する思惟形態を想定している。中井正一の著作を再構成することにより、私たちはメディア史と思惟形態の図式を得ることができる。しかし、中井の著作から得られるメディア史的展望の価値をすぐに肯定しようというわけではない。私見では、二〇世紀前半になされた中井によるメディア史的展望の定式化は、マクルーハンやオング、そしてポスターなどによる現代的な定式化とは異なっている。この相違をふまえた上で、中井の定式化を詳細に検討し、現代に拡張しうるか否かを評価するのは本稿の課題ではない。本稿で試みたいのは、中井のメディア史的図式の解説や現代への適用可能性を模索することというよりむしろ、メディアと思惟形態に関する彼の思考の形成過程を辿り、その地層の周囲に広がる思考の鉱脈を探ることである。本稿では、まず、中井正一におけるメディアと思惟形態の関連という問題系が展開される過程を時代をおって確認する（第二章）。次に、その理論的背景として、機能概念の受容と形而上学的対立への批判に注目する（第三章）。そして、身体の拡大としての機械という視点に加え、機能概念を中井が発展させる過程で現れた技術の問題について考察し、芸術における媒介について言及する（第四章）。

二、メディアと思惟形態

(a) 音声／文字／活字

一九二〇年代から三〇年代に書かれた初期の論文の中で、中井正一は既にメディアと思惟形態の結びつきに関心を示している。ただし、我々が今日用いる意味で「メディア」という術語を中井が用いているわけではない。さらに、メディア論的と思われる中井の視点は幾つかの論文に分散しており、時に断片的な場合もある。以下で行うのは、現代の視点から中井の諸論考に潜在する諸要素を再構成する作業であり、これはメディアの歴史的変遷と思惟形態の変容の関連性という問題系を浮き彫りにすることを目的とする[3]。この際、特に初期中井における諸論文に注目する［「言語」（一九二七～一九二八）、「機械美の構造」（一九二九）、「春のコンティニュイティー」（一九三二）、「委員会の論理――一つの草稿として」（一九三六）］。

まず、注目したいのは論文「言語」（一九二七～一九二八）である。そこには、メディアと思惟形態の関連性に関する記述が見いだせる。前半部分で中井は、「言語の概念的、意味志向的」研究のみならず、「言語の芸術的意味」の研究に注目している。言語の芸術的意味の研究は、概念的意味の研究から切り離されたものではなく、両者は「交錯」して成立する。中井正一は、言語音響の実験心理学的研究に言及した後、言語を伝達器として見る立場を否定する。それによると、従来、言語は「単なる伝達器」とされていたが、「それが単なる

壷であったのではなくして酒でもあった」のである［中井、一九八一a、二一六頁］。中井において、言語は単に概念的内容を伝達するだけの、いわば透明なものとして考えられているのではない。むしろ、言語そのものが「感覚的意味」を持ちうることが認められているのである。意味の透明な「伝達器」としての言語という前提をつき崩すこの視点に関連して注目されるのは、数年後、中井が内容と形式の区別を否定して「形式と内容の対立が自己解消する」と述べていることである。この点については第三章で再び取り上げることになる。

論文「言語」（一九二七～一九二八）で「伝達器」としての言語を否定した後、中井は、『ギリシャ天才の諸相』におけるブチャーの主張を紹介しながら、「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への移行に注意を喚起している。それによると、「『話されたる言葉』から『書かれた言葉』への過渡は、『書かれた言葉』から『印刷された言葉』への過渡よりも、想像力にとっていっそう驚くべきことであり、その結果においていっそう革命的であった」［中井、一九八一a、二一七頁］。では、いかなる意味で、「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への移行が「驚くべきこと」であったのだろうか。

中井によれば、ギリシャにおいて、「ポイニケーの符牒」[4]、すなわち「書くこと」が思惟の変容を要求していた。「『ポイニケーの符牒』が思惟の領域の変様を要求しつつありし当時のありさまを想像することができるであろう」［中井、一九八一a、二二一頁］。口承の文化に文字が現れ、普及したことに対応して生じた「思惟の領域の変様」として言及されるのは、「問答」から「説話」への移行である。「問答」は、言うことと聴くことからなり、二者間における「思惟の交易」である。これに対して、「説話」は、一つのこころの「自己生産」であり、「自己消費」である。口頭による「問答」と文字を通じた「説話」というこの対比に関連するのは、他人に語られる「外なる言葉」と自らに語りかける「内なる言葉」という対比である。したがって、書くことが要求した思惟の領域の変容とは、二者間における「思惟の交易」としての「問答」から、「自己生産」としての「説話」へ、換言すれば、他人に語られる「外なる言葉」から自己に語りかける「内なる言葉」への変容として考えられている。さらに、中井は、この対比に、ソクラテス、プラトン、そしてアリストテレスを関連づけている[5]。

口承文化から文字文化への移行の次の段階は「印刷されたる言葉」の出現、あるいは文字から活字への移行である。中井によると、プラトンとアリストテレスの言葉は、中世において、「神の言葉の了解」のために用いられたが、「書かれたる言葉」が「印刷されたる言葉」に移行するのにともない、人々は、プラトンとアリストテレスを「人の言葉」として了解しはじめた［中井、一九八一a、二二五頁］。ただし、ここでは、メディアと思惟形態の関連性が明確化されているとは言いがたい。

中井が古代のギリシア哲学を語ることで概念化したのは、口承文化から文字文化への移行に並行して、思惟の交易としての「外なる言葉」が自己生産としての「内なる言葉」へと変質したことである。

これはメディアと思惟形態を関連づける視点であると言える。では、近代における「印刷せる言葉」は、いかなる思惟形態に対応するものとして考えられているのであろうか。ここで注目されるのがヘーゲルの弁証法に対する中井の言及である。論文「言語」で中井は、声から文字、そして活字へと向かう言語におけるメディアの推移と弁証法論理の変容とを関連づけている。それによると、「会話による思想交易」としてのディアレクティク（哲学的問答法）が汎論理主義のディアレクティク（弁証法）となるまでには、

二千年の時と、「いわれる言葉」より「書かれる言葉」に、さらに「印刷せる言葉」への言語の運命の推移と、さらに、ヘレニックに代われるヘブライの思考法と、さらにそれに加わる前者の復活、すなわちパルメニデス、ゼノン、ヘラクレイトスの再生などのごときものが渾然と流れ交っているであろう。しかもその結果は、「外なる言葉」としてのディアレクティクの、「内なる言葉」としてのディアレクティクへの転生という興味深い現象として、私たちの前に提出されたのであった［中井、一九八一a、二二七頁］。

メディアと思惟形態の関連性という視点の一部を、ここに見てとることが出来るだろう。ただし、メディアと思惟形態が関連するとしても、メディアは決定的な契機としてではなく、背景の一つとして位置づけられている。論文「言語」の結論部分では、さらにメディアに注目した表現が見いだせる。

問答の形式をその始源とするディアレクティクが、汎論理主義的形式をもってする現今の意味におけるディアレクティクに転じたるその運命は、あたかも「いわれたる言葉」より「書かれたる言葉」、さらに「印刷されたる言葉」に移った言葉のもった運命に似通っている［中井、一九八一a、二四五頁］。

「似通った」という控え目な表現によってではあるにせよ、この箇所は言語におけるメディアの移行と思惟形態の変容を関連づけるものとして解釈しうる。この際、言語におけるメディアの移行と関連づけられているものが、思惟一般ではなく弁証法論理の変容であることは注意すべき点である。「委員会の論理」を構成するのは、「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」の各々が他のものに転化することによってである。この「委員会の論理」における「論理」という術語から遡行する時、初期中井においては、ディアレクティブの変化に対する関心がその背景にあることがわかる。ただし、メディアと思惟形態の関連を問う際に、理論的思考のみを重視し、常識的知識を軽視することは制約にもなりうる。

メディアと思惟形態の関連性の問題が展開される軌跡を辿ってきた。論文「言語」の後半部分が発表された一九二八年には、ソシュールの『一般言語学講義』が小林英夫によって翻訳されている。そしてこれ以降、中井の論文においてソシュールへの言及が現れるようになる。例えば、「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」

（一九二九）、「意味の拡延方向ならびにその悲劇性」（一九三〇）などにソシュールの名が散見される。しかし、中井における言語論の展開、およびソシュールと中井との理論的立場の相違は本稿では扱うことができない。ここでは、以下のことを再確認するにとどめたい。それは、メディアと思惟形態の関連性の問題を中井が展開した背景には言語論があったということである。久野収もまた、中井における言語論とメディアへの関心に着目し、以下のように述べている。「中井哲学の言語理論」は、「現世紀の開拓したレンズ、真空管、フィルムの言語、さらにはオーディオやテレビの言語といった機械的機能言語装置までを包括的に含みうる射程の遠さと広さを持つ」のである［久野、一九八二］。

(b)「電送せる言葉」と「見る言葉」

先に検討した論文「言語」（一九二七～一九二八）の後、メディアと思惟形態の関連性の問題は、拡張された形で「機械美の構造」（一九二九）に現れている。そこで中井は、「言う言葉」より「書く言葉」、そして「印刷せる言葉」のみならず、「カメラのレンズ」と「電送せる言葉」に言及し、先の問題系をさらに拡張しようと試みている。

> ベラ・ボラージュは印刷機械が人の思惟形態の意味を変えたるごとく、カメラのレンズの出現は人の視覚形態の意味を変えたとのべている。印刷機械と人の思惟の関連に関しては、それに関連して、さきにブチャーが「言う言葉」より「書く言葉」への転換においてギリシャが示した思惟形態の変革を指摘している。「書く言葉」より「印刷せる言葉」への転換についてはユーゴー、およびタルドがフランスにおいて示した思惟形態の変革を指摘している。「印刷せる言葉」より「電送せる言葉」に転じた現代においてそれが思惟ならびに人の感覚にもたらす変革は何ものか注意すべきものがあるであろう［中井、一九八一c、二四三頁］。

このように、論文「機械美の構造」（一九二九）では、音声と文字、活字に加え、「電送せる言葉」にまで展開された形で、メディアと思惟形態の関連性が指摘されているのである。中井におけるメディア論的発想の背景としては、ルカーチ[6]と交流のあったバラージュのサイレント映画論が指摘できる。「機械美の構造」（一九二九）における中井の記述は明らかにバラージュの『視覚的人間』（一九二四）をふまえたものだからである[7]。「今や一つの別の機械が文化をあらたに視覚的なものの方に転回させ、人間に新しい顔つきを与えはじめている。この機械はシネマトグラフィー（活動写真）と呼ばれる。印刷術と同じく、それは人間の精神の生産物を複製し普及するための技術的装置であるが、それが人間文化に及ぼす影響は印刷術にくらべて勝るとも劣るものではないだろう」［バラージュ、一九八六、二七～二八頁］。バラージュが指摘した印刷機械とカメラの効果[8]という視点に対し、中井は「電送せる言葉」が思惟と感覚に与える効果という視点をつけ加えた。ただし、この術語は「機械美の構造」で明確に説明されているとは言い難く、論文「委員会の論理」

の図式でも使用されていない。

論文「春のコンティニュイティー」（一九三一）では「映画語」あるいは「見る言葉」という術語が導入されている。この論文で分析されるのは、ワン・ショットが平均一・七九秒であり、時には、〇・六秒以下の短い映像が連続する映画『春』である。そこでは各映像のもつ意味は希薄となり、映画は絵画的なものから「音楽的要素ならびに言語的要素」に変容しつつある。これによって「言語構造でも聴覚構造でもない新しい感覚的構成」が出現している。この段階に達した映画について中井は、「いう言葉、書く言葉、印刷する言葉、電送する言葉と転じた言葉の歴史は、今いずれの国語にも飜訳することを要しない見る言葉の領域をもつにいたった」と述べている［中井、一九八一c、一五〇頁］[9]。

(c) 論文「委員会の論理」における定式化

一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、中井正一はメディアと思惟形態の関連性の問題に注目していた。この視点は、知識の存在拘束性をメディアに見出すものと解釈できよう。ただし、中井がメディアと思惟形態の関連性を指摘する際、メディアは必ずしも決定的な要因と見なされているわけではない。

これまで考察したメディアと思惟形態の問題は、論文「委員会の論理」（一九三六）で、社会制度への視点とともに定式化される。ただし、「電送せる言葉」と「見る言葉」という術語は十分に展開されることのないまま、論文「委員会の論理」の図式では使用されていない。これ以外に論文「委員会の論理」で特徴的な変化は、言語メディアと思惟形態の関連がより強調されていることである。「いわれる言葉」より「書かれる言葉」を経て「印刷せる言葉」への移行があり、この過程が論理の変容と並置されるという間接的な記述はもはや採用されていない。例えば、「いわれる言葉」ではなく、「いわれる論理」という直接的な術語が用いられているのである。

中井によると、論理のギリシャ的段階では、「いう言葉」の合理性（人々をして論服せしめるための合理性）がその形態に染み込んでいた。「いう言葉をもってのみ考えることを欲したギリシャ人は、いう形態における論理をもった人々と考えるべきである」［中井、一九八一a、四七頁］。ただし、氏族制度の崩壊と奴隷制の爛熟期において、話し言葉が論理を規定する点のみならず、「街の広場」が「論理の発生する酵母」であることが指摘されている。メディアのみが注目されているわけではないのである。さて、「いわれる論理」の次の段階は洋皮紙に書くことである。「洋皮紙に書くことの性格は、その概念の理解に対して、一方的な一義的な意味志向が要求され、一つの言葉が一つの意味を志向するという、言語意味および概念構成が生ずる」［中井、一九八一a、五二頁］。ここでは、言語の意味は一義的な意味志向をもつものとして考えられている。そして「交通の発達と商業の勃興」によって紙と印刷術が普及し、活字的な思惟形態が現れる。

ここではすでに、「いわれる論理」「書かれる論理」に対しては、

「印刷される論理」が生じつつあるのである。印刷のもつものは、タルドが示すごとく、publicumの出現である。ここでは言語意味は、すでに一義的な意味志向が許されなくして、活字となって公衆の中に言葉が手わたしされる時、すでに公衆のおのおのの生活経験とおのおの異なった周囲の情勢にしたがって解釈される可能の自由が与えられるのである［中井、一九八一a、五三頁］。

書き言葉に一義的な意味を見出し、活字において多様な解釈を見出す中井の視点は、メディアの移行と意味への注目において、一見、マクルーハンと類似しているように見える。しかし、両者は対照的でもある。マクルーハンの場合は逆に、写本文化における文字に多義性が想定され、活字の中に一義性が認められるからである。

中井の図式では、「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」はそれぞれ古代、中世、近代の文化に対応する。メディアと論理の関連という問題は、上部構造の領域のみで完結するものではなく、各時代の社会的文脈に位置づけられている。しかし、思惟形態は技術としてのメディアによって決定されるのではないのと同様、社会によって一方的に規定されるわけでもない。「論理は、常に一つの制度の崩壊とそのほかのものによる再編制とによる危機において、何らかの特有な役割りを演じている。すなわち、論理みずからが…（省略）…媒介となっている」［中井、一九八一a、六八頁］。社会制度の移行によって論理が規定されるだけではなく、ある社会的制度から別の制度への移行において論理は媒介的な役割を果たしうる。これは、土台がイデオロギーに作用しその反作用が土台に影響を及ぼすという議論とは、論理の自己否定という点で異なる［竹内、一九八〇、一六九頁］。各文化段階の論理は、他の論理を別のものに転換し、自らのものとして保持するが、それ自身も新しい様相を獲得していく。制度から制度への移行において媒介的役割を果たした論理は、保持されると同時に、他のものへと転化する。

三、機能概念の受容

一九二〇年代後半の論文「言語」を始めとして、メディアと思惟形態の関連性という問題が展開され、それが一九三〇年代半ばの「委員会の論理」に結実してゆく軌跡を辿ってきた。メディアと思惟形態を巡る中井の思考が形成されたのは、マス・メディアが日本に現れるか、あるいは普及していった「第一のメディア時代」に重なっている[10]。例えば、一九二五年には、東京、大阪、名古屋の放送局がラジオ放送を開始しており、一九二八年には高柳健次郎がテレビジョンの実験に成功している。一九二九年には初の輸入トーキー映画の公開があり、一九三二年にはラジオ聴取者は一〇〇万を突破する。しかし、本稿では、中井の思考の理論的な背景に照準を定めたい。第一に注目したい点は、『実体概念と機能概念』（一九一〇）[11]におけるカッシーラーの主張を中井がいったん受け入れたことである[12]。機能概念をめぐる問題系は、メディアと思惟形態の関連性という問題系と共に、論文「委員会の論理」に盛り込まれているこ

とから、両者は関連づけて理解されるべきである。第二に注目したいのは、機能概念の受容に伴い、主観／客観、内界／外界、内在／超越、内容／形式などの形而上学的対立を中井が批判している点である。では、「機能概念の美学への寄与」（一九三〇）、「ノイエ・ザッハリッヒカイトの美学」（一九三二）、「委員会の論理」（一九三六）などの論考を参照しつつ、機能概念への転換、およびそれがもたらした理論的帰結を考察する。

(a) 実体概念と機能概念

実体概念を前提とする概念形成の理論においては、個別的な記憶表象から共通の要素が抽象され、その性質を一つの類に結合することによって概念が生じると考えられる。カッシーラーによると、この手続きをより高い水準にまで繰り返すことにより、「概念ピラミッド」が現れる。この場合、概念の意味内容としての内包が少なくなるにつれ、概念の適用範囲としての外延は拡大する。逆に、外延が拡大するには内包の制限が伴うために、「もっとも普遍的な概念」は「特筆すべき特徴や規定性をもたないということになる」。そもそも概念とは表象内容の無規定性と曖昧さを一義的な規定で置き換えることである。しかし、ここでは概念形成の最終的な目標は空虚なものとなり、「論理学的手続きを行えば行うほど、明確な境界が消えてゆくように見える」［カッシーラー、一九七九、七頁］。このように、実体概念には抽象性という陥穽が伴っている。これに対置されるのが機能概念である。それは諸事物とそれらの共通の性質からではなく、概念対象間の〈関係〉から出発する思考を前提とする。個々の部分は、分離されるのではなく体系における関係構造のなかで把握される。事物はあらゆる関連に先行する自立的実在として措定されるのではなく、観念的な相互性においてはじめて与えられうる関係項（Relationsterm）として把握される。

中井は「機能概念の美学への寄与」（一九三〇）の中で機能概念について言及し、それが「純粋なる関係の学としての函数論理」に基づいていると述べている。この論理では、「すべては有機的組織として各要素はそれ自身一々の働きをもって、一つの複合的関連的組織を構成する」。これは量的な考え方における等しさは、ある「集合要素の他の集合要素への対応的関係」を、いわば「位置的に等値であること」を意味するようになる［中井、一九八一a、一七一～一二頁］。中井の理解する機能概念において、一般的概念は諸機能の複合として定義される。例えば、窓の概念は、円や四角などといった個人の記憶表象から出発するのではなく、通風、展望、採光の三機能の複合となる［中井、一九八一a、九頁］。このように、カッシーラーの「機能概念」や関係論的思考を中井は摂取している。ただし、中井はカッシーラーの機能概念は技術にまで適用されなかったと述べ、『実体概念と機能概念』の限界を指摘している。

(b)「可動の境界」

『実体概念と機能概念』の中でカッシーラーは形而上学的区別の

批判をも行っている。それによると「形而上学に特有の手続き」は、認識の領域において相互的にのみ規定される一対の観点を分離させること、論理的に相関するものを事物的に対立するものへと解釈し直すことである。そして、一つの対立が設定されることにより、他の対立が発展してゆく。この傾向が顕著に見出されるのは、認識の主観と客観の関係という問題である。この形而上学的手続きに対して、カッシーラーは相互に分離された「不動の境界」ではなく、認識が発展する中で「不断に移りゆく可動の境界」を問題にすべきだと主張する。例えば、認識の現在の段階は、「過去のものと較べてみれば『客観的』と見えるのと同様に、将来のものに較べれば『主観的』である」[カッシーラー、一九七九、三一八頁]。カッシーラーにおける対立は「空間的」なものではなく、「動的」なものである。機能概念の立場は形而上学区別を方法上の区別へと置き換える。

形而上学的区別に対する批判は中井の著作からも読みとれる。「形而上学は伝統的にしばしば、思惟と実在、主観と客観、物と精神などをおのおの分離対立した『物』として論じすぎた」のであり、さらに「現代の唯物論の考えかたにもまた、この形而上的解釈、すなわち観念を一つの作用の実体的根拠と考える誤謬に誘い込まれている」側面がある[中井、一九八一b、一七頁]。「主観および客観」という対立概念についてもまた、中井は「機能概念よりすれば、むしろ消滅し解体さるべき」であると述べている[中井、一九八一b、一六頁]。「カッシラーにとっては現在の状態は過去のそれに対して客観的と考えらるると同時に、現在の状態は未来のそれに比して主観的と考えられる。すなわちその間には函数的関係が成立するのみである」。時間の視点を導入することによって、主観と客観が相互転換されるという論理を中井も受け入れているのである[13]。

主観と客観の区別への批判はさらなる理論的移動を引き起こす。こうした批判によって、主観と客観の「付随概念」である「形式と内容の対立が自己解消する」のである。「形式の概念はすでに物の外縁、外形の意味を捨てなければならない。内容に対してそれを盛る容器としての考えかたを捨てなければならない」[中井、一九八一b、二四～二五頁]。内容と形式の区別が崩壊した後、形式をもはや「内容に対してそれを盛る容器」と考えることは出来ない。そのかわりに、発展の行為そのものによって等値性が発見されること、すなわち行為の機能的記録としての形（Form）という概念が提示される。内容と形式の区別を批判する視点と言語メディアの移行に対する注目は密接に関連するものと思われる。ただし、メディアがメッセージとなるように、言葉の形式が内容を規定するというわけではない。「形」は行為の中で考慮されているからである。

(c) 機能の論理への批判

中井による機能概念の受容は、関係論的思考のみならず、形而上学的対立への批判を経過することでもあった。しかし、「機能の論理」に対する評価が不変であったわけではない。「委員会の論理」（一九三六）では、「機能の論理」への批判的視点が明確に打ち出されている。中井によると、一八七三～八年にあらわれたジグワルトの『論

理学』、一九〇〇年のフッサールの『論理学研究』、一九一〇年のカッシーラーの『実体概念と機能概念』をへて、カルナップで極致に達するまで、論理学では「論理の数学化」の傾向が生じている。この段階では、論理が大衆から分離する傾向が進行する。科学技術によって作り出される物の概念の決定において、一般的機能概念を持つのは専門的技術家であり、大衆は記憶表象の集合を持つに過ぎないという状況がうまれる。抽象化を避けるために実体概念から機能概念へと移行したにもかかわらず、「論理の数学化」を経過することによって機能概念はあらたな抽象に転化したと否定的に評価されるのである。さらに、「美学入門」（一九五一）では、中井は機能概念を機械時代に適応した理論に属するものであると批判し、これに対して、機械時代に抵抗し警告した理論の例としてマルクスに言及している。

四　技術と媒介の問題

『哲学研究』で発表された「機能概念の美学への寄与」（一九三〇）の中で、中井は、技術の問題にふれている。そこで中井が述べているのは、カッシーラーの『実体概念と機能概念』ではまだ「問題にされざる技術の問題が、彼の意味する機能概念の深い発展」だということである。中井は、単に機能概念を受容しただけではなく、機能概念の発展として技術の問題を位置づけているのである。以下では、技術の問題に言及する前に、まず、機能概念の帰結として意識概念が射影の視点から書きかえられ、身体の拡大として道具と機械が考察される過程を確認し、その後、媒介としての技術について考察する。

(a) 身体の拡大としての機械

すでに見たように、カッシーラーの機能概念において、物は関係の中で把握されていた。これに伴い、写像(Abbildung)の意味も変容する。それは外的印象に照応する概念的な模像を作ることではなく、諸要素を体系的統一に統合する思惟の対応づけとなる。写像は思惟と思惟対象の必然的な秩序をつくるのである［カッシーラー、一九七九、四三頁］。中井の場合、この問題は「模写」という術語によって語られている（「模写論の美学的関連―一つの草稿」）。実体概念から機能概念への移行によって、外界の物が意識に鏡のように映されるという従来の模写概念は放擲される。物は実体ではなく機能的関係においてとらえられ、諸要素を体系において把握する「思惟的配置」が新たな意味での模写となる［中井、一九八一a、一一頁］。中井においてもまた、模写（写像）は外界にある物を意識に映すのではなく、機能的関係としての物と思惟的配置との対応関係と考えられている。

実体概念の否定は、実体としての物を映す実体としての意識を否定することでもある。機能概念への移行により、意識はもはや実体ではなく、「行為において発見されたる関係の構造」としての射影、あるいは「行動の射影的関係」として把握される。射影は意識体験

ではなく、リアルな事物がパースペクティヴにカットされて現出する仕方を意味する。意識は「全世界系列を射影しうる可能構造」であり、「行動の射影的関係」である。ここで意識は行為の次元を重視した関係論的思考において把握されている。

射影の視点から意識の概念が書き直された後、無意識も再考される。中井は意識構造を三つの領域に区分している。まず第一に、記憶表象や認識に至らない「直接射影」の領域がある。ここには直接的で反射的な行為が含まれる。第二に、全ての認識が属している「上部射影」の領域がある。ここで形成される世界像は歪曲されており、「直接射影」と同様に、イデオロギー論の対象となる。第三に、「認識の達しない深さ」において自らの状況を模写し、保持するものとしての「基礎射影」の領域がある。そこには自分にもわからない自分が横たわっている。認識を経過しながらも、認識の達しない深みにおいて自己の状況を把握し、実践的に判断する批判的精神が「基礎射影」の領域に対応する。

意識が「行動の射影的関係」であるとすれば、意識の射影構造を媒介する自然構成が身体である。そして、自然構成としての身体の機能を拡大するものが道具であり、機械である[14]。身体はあらゆる「機能の複合体」であり、「その機能を補足し、倍加する構成体」が道具と機械であるとされる。道具は、「身体の拡大射影」であり、機械はさらに身体の機能を拡大してゆく。「飛行機と人の跳躍、艦船と遊泳、レンズと眼球、ラジオと鼓膜ならびに声帯等々の構成は、自然構成より道具、道具より機械への機能拡大への過程である」[中井、一九八一a、一九四頁]。道具と機械が身体の機能を拡大するという時、それは射影の視点から捉えるべきであろう。意識は「行動の射影的関係」であり、この意識の射影構造を媒介する自然構成としての身体があり、その身体の機能を拡大するのが道具と機械である。知覚はもはや身体のみならず、道具と機械と共に思惟されねばならない。実際、論文「芸術における媒介の問題」(一九四七)では、機械時代における射影機構の姿が描かれている。

今や、歴史的段階は、個人的意識段階を乗り越えて、集団的意識段階に向いつつある。射影機構は、機械的技術を中に含めて、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷などの機構を貫いて、物質的感覚ともいうべきものが、集団人間の感覚として、表現、観照の要素となりはじめた。それらの感覚要素を素材として委員会という近代的集団思惟の機構は、個性単位の意識を越えたる新たなる性格を、人間社会に導入するにいたった[中井、一九八一b、一三三頁]。

ここでは、知覚は、身体のみならず機械をも含めて考察されている。知覚の変容という視点から機械を身体の拡張とみなす発想はマクルーハンの言う「メディア」を想起させる。しかし、細かな点において両者は異なる。中井の場合、身体拡張としてのメディアによって感覚麻痺が生じるという問題は意識されていない。また、テレビの普及以前に組み立てられた中井の議論には、機械時代における

身体の拡張から電気技術の時代における中枢神経組織の拡張への移行、あるいは専門化と細分化の過程が進行する外爆発が統合的な内爆発に逆転(reversal)するという問題は含まれてはいない。

むしろ中井の慧眼は、意識をもった個人が相互に意志を伝達するものとして委員会を考えなかった点にあり、また行動において知覚の規定性を考察する点に求められよう。レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷の機械が介在することによって、知覚の条件が変容し、物質的感覚ともいうべきものが集団における人間の感覚に浸潤する。委員会が集団的コミュニケーションの一形態であるとするならば、そこにはメディアによる認識の規定というメディア論的視点が絡み合っている。この時、射影機構が「行為において発見されたる関係の構造」である以上、メディアによる知覚の規定はメディアを利用する行為において作用するものと考えられている。

(b) 媒介としての技術

行為に重心をおいた関係論的思考において意識が再定義され、身体のみならず、その拡大としての道具や機械と共に知覚が考察される様を確認してきた。興味深いのは、射影構造を媒介する自然構成としての身体が、道具と機械という人間の所産と結合されている点である。中井における技術概念は、これと対応するかのように、自然系列と人間的系列を結合する媒介として定義されている。以下では、機能概念の発展として捉えられた技術の問題について、「模写論の美学的関連」(一九三四)、「委員会の論理」(一九三六)、「芸術における媒介」(一九四七)などの論考から考察する。

技術を考察する際、中井は生産力との関連に注目している[15]。生産力の構造は、労働力と労働対象、そして労働手段の三要素からなっている。労働力と労働手段を関連づけるものが技術機構である。したがって、技術と生産力は密接に関連しながらも互いに異なっている。ただし、技術は、生産力との関連のみならず、自然との関連においても考察されるべきである。

中井によると、自然の存在は、それが「可能であるか不可能であるか、現実であるか非現実であるか、偶然であるか必然であるか、そのいずれであるかを問う」ものである[中井、一九八一b、一二六頁]。これに対して技術の概念は、動的な構造を持つ。技術的な手段によって、水の落下(自然的因果律)は電気機械の運動(人間的秩序)へと転化しうる。技術においては、自然的系列的要素は人間的系列的秩序に結合され、そこでは自然的進行と技術的対象の新しい必然的な秩序が発生する。自然的系列的要素と人間的系列的秩序を結合するものとして、技術は媒介的な役割をはたしているのである。さて、重要なのは、二系列を結合する技術によって論理の領域にもたらされる交流的構造である。自然的系列において、可能/不可能、現実/非現実、偶然/必然のいずれであるのかが問題となるとするなら、技術の問題によってこれらすべての軸に重大な変化が生じる。技術によって論理の領域は、「現実より非現実へ、非現実を現実に、可能を不可能に、不可能を可能に、偶然を必然に、必然を偶然に、

おのおの相互に転換し模写するところの新たな機構、いわば交流的構造となる」のである［中井、一九八一a、八七頁］。例えば、「航行する風船」は、かつてブレンターノの論理書で虚偽の概念として用いられていたように、非現実的な概念であった［中井、一九八一a、一六頁］。しかし、一九二九年、飛行船のツェッペリンは現実となって世界を一周した。この場合、「航行する風船」という非現実の概念は、技術の展開により、現実に転化しているのである。自然の論理が一方的で直流的であるとすれば、技術の論理は相互転換的かつ交流的である。自然的系列を人間的系列秩序に結合するために、二系列を相互転換する媒介的契機が技術の論理の構造である。

(c)芸術における媒介

このように、中井は機能概念を技術に適用している。しかし、技術の論理は無批判に肯定されているわけではなく、技術概念は生産の論理の中で認識されなければならないものとして位置づけられている。この生産における技術はさらに芸術における技術によって補完されなければならない。それは「技術そのものがやがて、単に現実を非現実とし、非現実を現実とする方向にのみ発展して、最も基礎たるべき、人間の積極的目的的活動の線にそうてという方向性を失わない」ためである［中井、一九八一a、一八頁］。技術が発展するなかで目的的活動の方向が忘却されることへの懐疑は、生産技術にかわって芸術の技術に重要性を付与する。芸術は生産技術とは異なる側面から目的的活動の方向性を照らし出すからである。

生産的技術と別の方向から目的的活動の方向を照らし出す例として中井があげているのが映画『トゥルクシーヴ』である。しかし、中井は映画の具体的な内容にふれていない。ここではまず、バラージュの記述を参照してその内容を説明したい［バラージュ、一九九二、二三五～二三八頁］。トゥーリンの作であるこの映画では、シベリアとトルキスタンを結ぶ最初の鉄道建設が描かれている。二つの地方は経済的に相互依存しているが、砂漠で隔てられているため人々の生活は困苦にさらされている。その緊急な救済策が鉄道の建設である。しかし、氷点下四二度という北部の気温、砂漠地帯である南部の猛暑などの障害がある。障害との神話的格闘に参入する人々を映像は古代の叙事詩のように描き出す。

『トゥルクシーヴ』は単なる記録映画ではない。この映画はトゥルクシーヴ鉄道の建設中に制作され、映画の終わりには「一九三〇」という字が現れる。鉄道は一九三〇年に完成される予定だったからである。この映画は一九二八年に制作され、トゥルクシーヴ鉄道建設のために働く労働者に見せられた。フィルム上で完成された『トゥルクシーヴ』を見た労働者は深い感銘を受け、予定より六カ月早く建設を完了することを誓った。このために、鉄道は予定より早く動き始め、ヨーロッパの観客向けにこの映画が再編集される際には終わりのショットの日付が「一九二九」に訂正されねばならなかった。したがって、映画『トゥルクシーヴ』では、鉄道建設の現実が非現実である映画に移行している。しかし、建設工事が促進された時、非現実としての映画は現実となっている。映画『トゥルクシー

ヴ』についてバラージュはこう述べている。現実としての生活と非現実としての芸術は、「互いに手をたずさえて平行して進み、互いに相手を揺り動かし、互いに刺戟し合いながら、認識によって一定の方向に導かれる」[バラージュ、一九九二、二三八頁]。

映画『トゥルクシーヴ』において、現実の鉄道が映画化されたと言うことはやや不正確である。なぜなら映画『トゥルクシーヴ』は、一九三〇年に完成する鉄道を一九二八年に撮り、モンタージュによってフィルムの上で完成させたからである。中井が指摘するように『トゥルクシーヴ』は完成された現実の鉄道を再現した「時にそってのリアリズム」ではなく、編集によって作られた「非現実の現実」と言うべきものである。中井はこう述べている。非現実である映画『トゥルクシーヴ』こそが「現実そのものよりももっと完全な、もっと迫るような、もっと納得できる現実そのものなのである」[中井、一九八一a、二〇頁]。

中井においては、技術のみならず、芸術においても、現実と非現実は「相互転換的」である。ただし、芸術は生産的技術とは異なる仕方で目的的方向を照らし出す。現実よりももっと現実的な虚構としての映画を見ることによって、「人間が何に飢えていたのか何に渇いていたのかを、初めて知ることができるのである」。これは単に認識の領域で生じるというよりむしろ、認識の達しない深みにおいて行動体が自己の状況を射影する「基礎射影」の次元における出来事と考えるべきであろう。ここで「芸術における媒介」[16]が問題となる。「媒介」は「直接性（無媒介）」と共に用いられる概念である[17]。中井の場合、「媒介」は、論理そのものが行動を離れては成立しないという地点において可能になる「無媒介の媒介」として考えられている。この「無媒介の媒介」は、積極的な切断を自分自らに加え「自分を切ってすてることで、自分が発展する」こと、あるいは「自分自身を否定の媒介とする」ことであり、ヘーゲル論理学の媒介概念よりも一世代成長したものと述べられている。中井の自己媒介の論理のなかで強調されるのは自己同一性に回帰する側面ではなく[18]、自己から「離脱」する側面である。中井が映画に見出したのはこの意味における媒介である[19]。「自分みずからを否定の媒介とするというミッテルの媒介、すなわち離脱の精神の中に初めて私たちは、新たな時代に今あらわれつつある芸術の媒介概念を見いだすのである」[中井、一九八一b、一三六頁]。

【注】

(1) 中井研究という場合、中井の著作の解釈を一次的な課題とする狭義の中井研究と、彼の視点の継承・展開を課題とする広義の中井研究を想定しうる。ただし中井正一自身が「離脱」を強調していることから、狭義の中井研究も彼の視点を展開することに注意を払わざるを得ない。両者は切り離されるべきではないのである。本稿では、両者を含めて中井研究と呼んでいる。

(2) この点については、[門部、一九九八b]の中で検討した。山田宗睦において、「委員会の論理」はテレビを射程に含む「メディア史の論理」に展開されている。その試みは、反映論ではなく「媒介作用」の論理に依拠したものであり、そこではメディアによる認

識の規定性が歴史的に定式化されている。また、針生一郎の中井正一論においては、「中井正一の射影の概念は…省略…メディアをもふくんでいる」とされる［針生、一九七三］。

(3) 先行研究としては佐藤晋一の論文「中井正一のコミュニケーション論―『集団的主体性』形成の論理―」があり、ここでも「メディア」という術語が用いられている［佐藤、一九九六］。本稿との相違は、中井におけるメディア論的発想の形成過程、及びそうした発想の背景に本稿が焦点をあてていることがある。

(4) 「ギリシャ人にとって書くことは野蛮人（バルバロイ）の仕事であり、ポイニケー人の伝えたる『ポイニケーの符牒』であった」［中井、一九八一a、二二七頁］。

(5) 中井の議論をやや図式化すれば、ソクラテスにおける「外なる言葉」、そしてこれを「書き写した」プラトンの「内なる言葉」があり、この両者と異なるものとしてアリストテレスにおける「両者の分かちがたき溶融」、あるいは両者のコロス的な併存が整理できる。ただし、中井は、プラトンの文字批判を指摘した上で、「文字のプラトン」という表現を用いている。全く異なる文脈においてだが、トロント・コミュニケーション学派と呼ばれる古典学者ハヴロックの著作、『プラトン序説』（一九六三）においても、プラトンのイデア論の成立と文字文化の関連が指摘されている。ただし、ハヴロックにおける口承の文化と文字文化などの二分法の問題は以下を参照：［Melberg, 1995］。

(6) バラージュの『視覚的人間』が出版されるほぼ一〇年前の一九一三年、『フランクフルト新聞』に発表したエッセイで、すでにルカーチも「映画美学」について論じている［ルカーチ、一九七五］。

(7) 中井が参照したと思われるバラージュの記述は以下の通りである。「ヴィクトル・ユーゴーは、印刷された書物は中世紀に大伽藍の果たした役割を引きつぎ、民衆の精神の担い手になった、とどこかに書いている。しかしながら、千冊の書物は、大伽藍に集中された一つの精神を千の意見に引き裂いた。…（略）…見える精神はかくして読まれる精神に変わり、視覚の文化は概念の文化に変わった。…（略）…さて、今や一つの別の機械が文化をあらたに視覚的なものの方に転回させ、人間に新しい顔つきを与えはじめている。この機械はシネマトグラフィー（活動写真）と呼ばれる。印刷術と同じく、それは人間の精神の生産物を複製し普及するための技術的装置であるが、それが人間文化に及ぼす影響は印刷術にくらべて勝るとも劣るものではないだろう」［バラージュ、一九八六、二七～二八頁］。

(8) カメラのレンズの出現による視覚形態の変化とは、精緻さや冷厳、鋭利、正確さなど「胸のすくような切れた感じ」を特徴とするレンズの見かた、すなわち「冷たい視覚」が「人の視覚」に浸透することである。

(9) 「見る言葉」に含まれるものとして、中井は「映画語」という術語も用いているが、それは「字幕の意味とは全然別」のものだと述べている。

(10) ポスターの図式によると、「第一のメディア時代」では、一般に、少数の製作者が多数の受け手に情報を送るという「コミュニケーションの放送モデル」が支配的であった（映画、ラジオ、テレビなど）。これに対して「第二のメディア時代」では、コミュニケーションは双方向かつ脱中心化されたものとしてモデル化され、製作者／分配者／消費者の各項の境界は崩壊する（情報スーパーハイウエー、衛星技術、コンピュータ、電話など）［Poster, 1995:3］。ただし、これらの時代区分は、互いに包み込み、同時に存在しうるものとして考えられている［*ibid.*, p.21］。

(11) 山本義隆の訳では『実体概念と関数概念』と訳されている。ここでは、用語の統一をはかるため、中井正一の訳語を採用した。

(12) ただし、後に中井は機能の論理に対して批判的になり、また、当時カッシーラーの対極にあるとされたハイデッガーへの関心を示していることは忘却すべきではない。

(13) 主観と客観が、時間の視点を導入することによって相互に置き換えられるものとなったのに伴い、内界／外界の区別もまた函数的関連として理解されることになる。そして、内と外の区別がもはや自明なものでないのだとすれば、内在と超越という概念についても疑問が生まれる。実際、中井は、内在に対立するものとしての超越ではなく、「乗り越えること」としての、いわば内在的超越について述べている［中井、一九八一b、二一頁］。

(14) 身体の拡大としての機械という視点に関連するのは、『構想力の論理』第三章における三木清の記述である。彼が道具を論じる際、道具は「無意識的な投影」であり、「エスピナスの云ふ如く、器官の無意識的な投影、延長された身體」だと述べている。道具が主体的かつ客体的であるように、三木における技術の本質は、主体と客体を媒介することであり、また目的論と因果論を統一するものとされている。

(15) ウエブスターは、マルクス主義における技術的発展を重視する潮流と政治活動を重視する潮流との相違について述べている。一般にマルクス主義においては、生産関係と生産諸力が区別される。生産関係は階級闘争や社会関係の領域であり、生産諸力はテクノロジーとテクニックの領域である（工場、機械生産、分業）。ウエブスターによると両者の相対的重要性については、科学的マルクス主義における分析のなかで常に緊張があったという。それは、生産諸力を重視する者は、社会変動における技術的発展の重要性を強調する一方、生産関係を重視する者は、変動をもたらすラディカルな政治活動を強調するという緊張である［Webster,1995：196］。

(16) 論文「芸術における媒介の問題」における中井によれば、古代の模倣、近代の創造、現代の反映という芸術概念のいずれにも、「主的なるものと客的なるものの媒介性」が見られるのだと言う。この芸術における媒介には三つの段階が考えられる。第一に、古代の形而上学的媒介（本質と現象の中間的媒介者として芸術を位置づけるもの）があり、これは奴隷制崩壊より封建制発生の段階に共通するヒエラルキー的世界観を背景としている。第二に、近代の認識範疇的媒介（悟性と理性、認識論的範疇の媒介的統一者としての芸術）があり、そこでは「媒介」という概念は卑しいものから高度なものへ昇格する。第三に、存在範疇的媒介がある。存在範疇的媒介では、非連続の連続としての媒介的役割が芸術に求められる。感情は、力学的な連続の原理＝時間空間の切断を満たす媒介としてあり、範疇間の等値的関連として、その意味の「象徴」として現れる。

(17) 「媒介(Vermittlung)」概念について、ヘーゲルは「媒介とは第一のものから出て第二のものへ移っていること」であると述べている（『エンツュクロペディー　小論理学』八六節）。「媒介」は「直接性」と関連して使用されるが、両者は排他的な対立において把握すべきではない。「直接性そのものうちに媒介が含まれている」からである（同右　七〇節）。媒介を通じて直接性が成立する時、そこにみられる「外的なものとの、また外的なものによっての媒介ではなく、自己そのもののうちで自己を完結する媒介」が「真の媒介」であるとされる（同右　六九節）。「直接知は媒介知の所産であり、結果であるという風に、両者は結合」されているので

ある。（同右　六六節）。ただし、中井正一の想定する媒介概念は、「ヘーゲルの論理学において考察せる媒介概念よりも、一世代成長せる媒介概念」であり、「ヘーゲルのいうところの、意識の面におけるメディウムの媒介」とは異なる［中井、一九八一b、一三六頁］。

（18）他者性を抑圧する、媒介された同一性に対するデリダの媒介性概念については［Ryan, 1982=1985］を参照。

（19）この点は純粋芸術に限定すべきではない。中井の映画論とポピュラーカルチャーとの関連は［門部、一九九八a］を参照。

【一次文献リスト】

中井正一『中井正一全集1　哲学と美学の接点』久野収編、美術出版社、一九八一a。

――――『中井正一全集2　転換期の美学的課題』久野収編、美術出版社、一九八一b。

――――『中井正一全集3　現代芸術の空間』久野収編、美術出版社、一九八一c。

――――『中井正一全集4　文化と集団の論理』久野収編、美術出版社、一九八一d。

――――『美学入門』朝日新聞社、一九七七。

――――『美と集団の論理』久野収編、中央公論社、一九六二。

――――『増補　美学的空間』鈴木正編、新泉社、一九八二。

――――『世界文化　復刻　(1)～(3)』小学館、一九七五。

【二次文献リスト】

荒川幾男『現代日本思想史5　一九三〇年代―昭和思想史』青木書店、一九七七。

稲葉三千男『マスコミの総合理論』創風社、一九八七。

今村太平、『映画の眼―文字から映像の文化へ―』光和堂、一九九二。

上野俊哉「レジス・ドブレの『メディオロジック宣言』を読む」『インターコミュニケーション』、一二号、一九九五。

Webster, F., *Theories of The Information Society*, Routledge, 1995.

カッシーラー、山本義隆訳『実体概念と関数概念―認識批判の基本的諸問題の研究―』みすず書房、一九七九。

桂英史「オートマトン・コンプレックス―端末市民の起源と進化―」責任編集桂英史『二〇世紀のメディア』第三巻、ジャストシステム、一九九六。

河野健二編『ヨーロッパ一九三〇年代』岩波書店、一九八〇。

久野収、『三〇年代の思想家たち』岩波書店、一九七六。

――――、「解題」、久野収編『中井正一全集1　哲学と美学の接点』美術出版社、一九八一。

――――、『ファシズムの中の一九三〇年代』リブロポート、一九八六。

――――、「京都学派と三〇年代の思想」『批評空間』、第Ⅱ期第四号、一九九五。

後藤和彦「コミュニケーション史の研究史」、『講座コミュニケーション2　コミュニケーション史』江藤・鶴見・山本編、研究社、一九七三。

佐藤晋一『中井正一・「教育」の論理学』近代文芸社、一九九六。

竹内成明『闊達な愚者』れんが書房新社、一九八〇。

田邊元、「ヘーゲル哲學と絶對辯證法」、『思想』、十月号、岩波書店、一九三一。

鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」、『思想』一九五七、七月号、『鶴見俊輔著作集第一巻』、一九七五。

――――「思想の発酵母胎」、『思想の科学』、中央公論社、一九五九、七。

――――「戦後からの評価」、『美と集団の論理』久野収編、中央公論社、一九六二。
戸坂潤、『イデオロギー概論』、一九三二、『戸坂潤全集　第二巻』剄草書房、一九六六。
――――、『技術の哲学』、一九三三、『戸坂潤全集　第一巻』剄草書房、一九六六。
Debray, R., *Cours de médiologie générale*, Gallimard, 1991.
Havelock, E. A., 1963, *Preface To Plato*, The Belknap Press of Harvard University Press. Cambridge.
バラージュ、『視覚的人間』、佐々木基一、高村宏訳　岩波書店、一九八六。
――――、『映画の理論』、佐々木基一訳、學藝書林、一九九二。
針生一郎「中井正一のコミュニケーション論」、江藤・鶴見・山本編『講座コミュニケーション1　コミュニケーション思想史』、研究社、一九七二。
Poster, M., *The Mode of Information : Poststructuralism and Social Context*, Polity Press,1990,（室井尚・吉岡洋訳『情報様式論』岩波書店、一九九二）。
――――、*The Second Media Age*, Polity Press,1995.
McLuhan, M., *Understanding Media:The Extensions of Man*, THE MIT PRESS,(1964), 1994.
マンハイム／シェーラー、秋元律朗／田中清助訳『知識社会学』青木書店、一九七二。
Melberg, A., *Theories of Mimesis*, Cambridge University Press, 1995.
三木清、「ヘーゲルとマルクス」、『唯物史観と現代の意識』、一九二八、『三木清全集　第三巻』岩波書店、一九六六。
――――、「マックス・シェーラー」『新興科学の旗のもとに』第二巻第五号、一九二九、『三木清全集　第十巻』岩波書店、一九六七。
――――、『構想力の論理』、一九三七～一九四三、『三木清全集　第八巻』、一九六七。
――――、『技術哲學』、一九四一、『三木清全集　第七巻』岩波書店、一九六七。
門部昌志、「中井正一の思想と映画―ポピュラー・カルチャーの社会学―」、『年報人間科学』第一九号、一九九八a。
――――、「中井正一研究とメディア社会学の視点」、『社会関係研究』第四巻第二号、一九九八b。
山田宗睦『コミュニケーションの文明』田畑書房、一九七二。
Ryan, M., *MARXISM AND DECONSTRUCTION:A Critical Articulation*, The Johns Hopkins University Press, 1982.（今村仁司・港道隆・中村秀一訳『デリダとマルクス』剄草書房、一九八五）。
ルカーチ、池田浩士訳『ルカーチ初期著作集　第一巻』三一書房、一九七五。
――――、城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社、一九九一。

Sociology of Technology and Mediation

Masashi MOMBE

The aim of this paper is to discuss the problem of technology and mediation in relation to the standpoint of the sociology of knowledge. Previously, Masakazu Nakai formulated the relation between mediums and forms of thinking in each cultural phase.

In this paper, we will begin by considering Nakai's perspective on the history of mediums and his theoretical background. In my opinion, this viewpoint is analogous to that of the sociology of knowledge in the sense that Nakai's perspective notes restrictions on knowledge. But, his perspective is not analogous to the sociology of knowledge, in the sense that the former finds restrictions on knowledge in mediums, which is not only extrinsic to knowledge but also intrinsic to it.

As theoretical background of Nakai, the first point to notice is film theory of Béla Balázs. The second point is the shift from the concept of entity to that of function. And the third point is the problem of technology which is regarded as development of the conception of function. For Nakai, technology is not conceived in the binary nature/human distinction, but in mediation which connect them. We will consider with Nakai's perspective on the history of mediums, and his conceptions of function and mediation, and his theory of technology, which forms his theoretical background.

Key words

Masakazu Nakai, function, technology, mediation, medium